

Chunk による記憶の有用性 — 無生物主語他動表現の場合を通して —

三宅 美鈴 (広島国際大学)

Abstract The purpose of this paper is to demonstrate how English learners acquire expressions in English and to explore effective ways of acquiring such expressions. In order to clarify to what extent memorization by chunking is effective, the following hypothesis is proposed: Expressions employing inanimate subjects with transitive verbs are produced more correctly by English learners in Japan than those employing animate subjects. The data analyzed for this paper are taken from the results of translation tests.

1. はじめに

英語が使われている場面に実際に身を置く機会がある日本人の中で、経験的に英語を第2言語として用いている非母語話者の発話を含め、国際的に流通している現実の「英語」と、自分たちの発話の間にギャップを感じている人は少なからずいるであろう。そのギャップの裏に存在するのが発想の違いであったり、また単語の意味の不一致によるものであったりと、複雑な側面をもっている「英語らしい」表現の特徴に由来しているのではないだろうか。したがって、一面的に「英語らしい」表現とは一体何であろうかという問いに対して、定義づけするのは非常に困難なものがある。要は、そのギャップを埋める際に、日英語の違いを認識し、英語の特徴的な表現とはどういうものかを知り、その表現を自分のものにしていく努力が必要であると筆者は考える。そこで、いかに英語学習者が英語らしい表現を獲得しているかを論証し、その効果的な方法を探ることが本研究の目的である。まず、先行研究から英語らしい表現の特徴として、大きく次の5つが挙げられる。

1) 状況中心と人間中心の表現

英語では人間を中心に据えてその人間がなにか活動したり認識したりする表現法を

とっているのに対し、日本語ではそのような人間は背景に後退しており、その場面の状況を捉えて表現している（國廣，1974；楳垣，1975；石綿・高田，1990；Hinds，1986）。例えば例文(a)(b)のように、日本語では主語に「冬」や「用件」を採り、状況を中心に捉えて表現しているのに対し、英語では人称代名詞の“We” (a)’や“I” (b)’を主語に採り、人間中心に表現をする傾向がある。

例：(a) ことしの冬は雪が多かった。（日本語）

(a)’ We had a lot of snow this winter. (英語)

(b) ご用件はなんですか。（日本語）

(b)’ Well, what can I do for you? (英語)

2) 肯定的表現と否定的表現

日本語では例文(c)(d)に見られるように「これくらいしかない」「読んだことがない」といった否定的表現を好んで用いる傾向があるのに対して、英語では“This is all ...”や“This is the most ...”のように肯定的表現を好む傾向にある（山田，1997；長谷川，1996；四宮，1999）。

例：(c) あなたにしてあげられることはこれくらいしかない。（日本語）

(c)’ This is all I can do for you. (英語)

(d) こんなすばらしい小説を読んだことがない。（日本語）

(d)’ This is the most fantastic novel I’ve ever read. (英語)

3) 全体と部分

『新クラウン和英辞典』の編者である山田和男（1979）は、英語ではつねに人間全体をとらえ、それを表現の中心に置くのに対し、日本語では人間の外側である状況か、人間のなかの部分をとらえて表現する傾向があると述べている。例えば、例文(e)’(f)’で表現されているように英語ではまず全体をとらえた対象物“me”“her”をまず先に出し、あとから、部分的なところである“head”“arm”を明らかにしていくという

特徴を示している。

例：(e) 彼は僕の頭を殴った。(日本語)

(e)' He struck me on the head. (英語)

(f) 彼は彼女の腕をつかんだ。(日本語)

(f)' He grabbed her by the arm. (英語)

4) 名詞的表現と動詞的表現

日本語は「こと」的な表現への志向性があり、英語は「もの」的な表現への志向性がある(池上, 1982)。例えば例文(g)においては「泳ぐのが」つまり「泳ぐことがうまい」という表現が(g)'では“a good swimmer”(うまい泳ぎ手である)という「もの」的表現がなされている。同様に(h)の「笑うことをした」は「笑いをした」(h)'の表現がなされている。

例：(g) 彼は泳ぐのがうまい。(日本語)

(g)' He is a good swimmer. (英語)

(h) 彼女はうれしそうに笑った。(日本語)

(h)' She gave a happy laugh. (英語)

5) 無生物主語他動表現

多くの研究者(國廣, 1974; 楳垣, 1975; 石綿・高田, 1990; 山田, 1997; 四宮, 1999; 池上, 1982)が指摘しているように、英語はSVO文型、つまり他動詞を好む傾向が強いと言われている。これは、上に述べた英語の名詞的表現とも通じるところであると同様に、池上(1982)の「する」と「なる」の表現にも通じている。つまり、英語では行為者が人であれ、ものであれ、動作主が動作を「する」という発想で表現する傾向が強いということである。この他動詞を用いて表現される「他動表現」とはこの行為者(主語)として表されているものが「目的語」として表されているものに対して、その行為を通じて影響を与えた表現を言い、その行為者(主語)が無生物の

場合に「無生物他動表現」という。この表現において文頭に置かれた語は関心の度合いが強い語であったり、話題の焦点になったりしている語であることが多い。こういった種類の構文は法律文や科学論文などの格式ばった表現に多く見られるが、これらに関しては日本語においても見られる文体であり、さして違和感はない。むしろ、日英語間における「無生物他動表現」に大きな違いを感じるのは法律文や科学論文ではない口語的表現のような少しくだけた文体の場合である（小島，1988）。また，無生物主語は婉曲さ，丁寧さを出そうとする表現でもある。たとえば，例文(j)'である“What brought you here?” は you の意思ではない，何らかの外的原因や理由があつて you がそこへやって来たのであつて，たとえそれが好ましくない理由であつても，それは you の責任ではないという言外のニュアンスを持っている表現である（p.193）。

例：(i) この薬を飲めば頭の痛いのは治るよ。（日本語）

(i)' This medicine will relieve your headache. （英語）

(j) どうして日本に来られたのですか。（日本語）

(j)' What brought you to Japan? （英語）

上記の日英語比較による特徴的な英語らしい表現の中でも特に無生物主語他動表現は，発想的に日本語のそれとかなり隔たりがあるため，日本人学生には指導上，構文，もしくは例文をそのまま暗記することを奨励し，その発想を身につけさせようとしている。たとえば，『教師のためのロイヤル英文法』（綿貫・淀縄・Petersen，1994）においては，4つの代表的な例文を挙げ（This medicine will make you feel better. A few minutes' walk brought us to the park. The bad weather prevented us from leaving. This song reminds me of my childhood.）暗記を勧めるように指導している。また，英語教師になじみの深い江川（1998）の『英文法解説』でも，無生物主語は構文として紹介されており，それに続いて無生物主語に伴う動詞を紹介し，主語との結びつきに関心を向けている。さらに，19の出版社による English Writing の高校教科書を調査したところ（付表1参照），その内の14冊が無生物主語を取り上げ，そのほとんどが，まず例文を日本語と英語で示し，練習問題は，カッコ内補充問題と日本語をヒントに英訳をするものであった。これらの練習問題の傾向からも『教師のためのロイヤル英文法』や『英文法解説』で紹介されているように文全体を暗

記するように指導している意図や、主語と動詞の結びつきをかたまりとして記憶するように導いている意図が見える。このように、日本の高校を卒業したばかりの英語学習者にとっては、無生物主語他動表現は構文として、あるいは、主語との結びつきによるある種のかたまり(chunk)として記憶されている場合が多いと考えられる。そこで、本研究では、「英語らしい」表現のひとつである無生物主語他動表現は英語学習者によってかたまり(chunk)として記憶された表現と捉え、その習熟度を測り、生物主語による表現のそれと比較することによって得た結果を参考にし、無生物主語他動表現だけでなく英語らしい表現を習得する上での効果的な方法を探ることとする。

1.1 仮説

Sinclair (1991) は、テキストはばらばらの語句からできているのではなく、ある一連の制限されたかたまりによって産み出されているものであるとしている。この主張を支持し、無生物主語他動表現も構文もしくは特定の動詞と主語というように、ある一連のつながりのある語句として記憶されていると考え、本研究における仮説を「かたまり(chunk)として記憶された無生物主語他動表現の英文の方が、生物主語で書かれた英文より英語らしさの観点から正しく表現される可能性が強い」とする。

2. 調査方法

調査対象者は高校卒業後、一年以上経っている学生は除外し、現役入学、すなわち高校を卒業してから一年未満の大学一年生男子 39 名、女子 86 名、計 125 名を対象に調査を行った。また、彼らの専攻は医療情報科、医療技術科、臨床栄養科、健康体育科の学生であり、英語を専攻にしている学生ではない。英語のレベルに関しては、TOEFL、TOEIC の受験経験はなく、英語検定では 2 級が 7 名、準 2 級が 20 名、3 級が 41 名、4 級が 15 名、5 級が 1 名、その他全国商業英語検定 2 級が 2 名、記述なし 39 名であった。

データ収集にはデータ分析の対象となる無生物主語他動表現を含む和文 10 問を 30 分で英語に置き換える作業をしてもらった(付録 1 参照)。和文には状況設定も加え、できるだけ口語的表現を書くように指示をした。また、アメリカ人 1 人とカナダ人 1 人、オーストラリア人 1 人の大学教員に同じ問を英語で答えてもらい、その結果より、問 2、問 3、問 5 は生物主語を用いたほうが自然となる英文であると判断した。そして、一問中、“global error” (詳細は後述)があれば、間違いとし 0 点、10 問で 10 点満点とした。採点に関して

特に留意した点は、1) 評価の信頼性を得るためにある一定の時間を空け、また、全員に公平な視点から採点できるように、被験者の順序を変えて、3回採点を見直し、2) 英文採点においては、Hendrickson (1978) や Beretta (1992) の提案に従って、3単現-s(es)の有無、スペルの誤り等の形式上は間違っているが、その文の意味理解にはほとんど影響を与えないような“local error”は誤りとせず、読み手が誤解したり、理解不可能となったりするような誤りは“global error”の誤りとして採点した。基本的に文の構造を崩すような誤りも“global error”として扱った。

3. 結果と考察

3.1 無生物主語 vs. 生物主語

表1：各問における主語の選択数と割合

| | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 合計 | % |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-------|
| 無生物主語 | 1 | 4 | 9 | 31 | 9 | 52 | 28 | 24 | 36 | 56 | 250 | 20.00 |
| 生物主語 | 120 | 112 | 103 | 71 | 72 | 55 | 64 | 82 | 57 | 37 | 773 | 61.84 |
| 無答 | 4 | 9 | 13 | 23 | 44 | 18 | 33 | 19 | 32 | 32 | 227 | 18.16 |
| | 125 | 125 | 125 | 125 | 125 | 125 | 125 | 125 | 125 | 125 | 1250 | |

表2：全体と主語選択別による正解率

| | 全体 | 無生物主語 | 生物主語 |
|---------------|----------|---------|---------|
| | 413/1250 | 143/250 | 270/773 |
| 正解率 (標本比率) | 33.04% | 57.20% | 34.92% |

表1が示すとおり、結果は主語の選択において、全体の61.84%の問いが生物主語を選択し、20%が無生物主語を選択していた。表2はそれぞれの選択された主語における正解率を示したものである。標本比率で生物主語を選択した問の34.92%が正解したのに対し、無生物主語を選択した問の57.20%が正解を占め、無生物主語をとった方が正解率が高い傾向にあることが分かった ($\chi^2=38.922$ $p=0.000^* < \alpha=0.05$)。

3.2 無生物主語を採る問 vs. 生物主語を採る問

表3：各問と各主語における選択数と正解数およびその割合

| | 無生物主語を採る問 | | | | | | | 生物主語を採る問 | | |
|-----------|-----------|----|----|----|----|----|-----|----------|-----|----|
| | 問1 | 問4 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問2 | 問3 | 問5 |
| 選択数 | 1 | 31 | 52 | 28 | 24 | 36 | 56 | 112 | 103 | 72 |
| 選択合計 | 228 | | | | | | | 287 | | |
| 正解数 | 1 | 23 | 41 | 18 | 15 | 17 | 17 | 23 | 11 | 21 |
| 正解数合計 | 132 | | | | | | | 55 | | |
| 正解率(標本比率) | 57.89% | | | | | | | 19.16% | | |

無生物主語を採ったほうが自然な英語表現とする問に対する無生物主語選択数とその正解数、および、生物主語を採った方が自然な英語表現とする問に対する生物主語選択数とその正解数を示したのが表3である。ここでも、無生物主語をとった方が自然な英語表現とする問1, 4, 6, 7, 8, 9, 10の平均正解率が57.89%であるのに対し、生物主語を採ったほうが自然な英語表現である問2, 3, 5の平均正解率は19.16%で、無生物主語を採った英文の方が正解率が高い傾向にあることが分かった($\chi^2=82.419$ $p=0.000^*$ $< \alpha=0.05$)。つまり、無生物主語を選んだ数は少ないが、その正解率は高く、それと反比例して、生物主語を選んだ数は多いが、その正解率は低いことを示している。以上のように、表2が示した無生物主語と生物主語の選択数と正解数とを全体的に比較した結果、および、表3が示した無生物主語を採ったほうが自然、あるいは生物主語を採ったほうが自然となる問に分けて出たそれぞれの正解率の結果を比べてみても、どちらも無生物主語を選択して解答した文のほうが正解率が高いことが分かった。

3.3 各問における無生物主語 vs. 生物主語

次に各問ごとに無生物主語と生物主語を比較し考察した。表4は各問における正解数とその割合、および主語の選択率、また、表5は各問におけるそれぞれの主語での正答と誤答の割合である。図1は各問における各主語の選択数と正答率をわかりやすくグラフ化したものである。

表4:各問における正解数と割合および各主語の選択率

| | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 |
|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 正解数 | 71 | 25 | 14 | 60 | 27 | 61 | 44 | 53 | 32 | 26 |
| 正解率 (%) | 58.67 | 21.55 | 12.50 | 58.82 | 33.33 | 57.00 | 47.82 | 50.00 | 34.40 | 27.95 |
| 無生物主語選択率 (%) | 0.80 | 3.20 | 7.20 | 24.80 | 7.20 | 41.60 | 22.40 | 19.20 | 28.80 | 44.80 |
| 生物主語選択率 (%) | 96.00 | 89.60 | 82.40 | 56.80 | 57.60 | 44.00 | 51.20 | 65.60 | 45.60 | 29.60 |

表5:各問における各主語の正解数と誤答数およびその割合

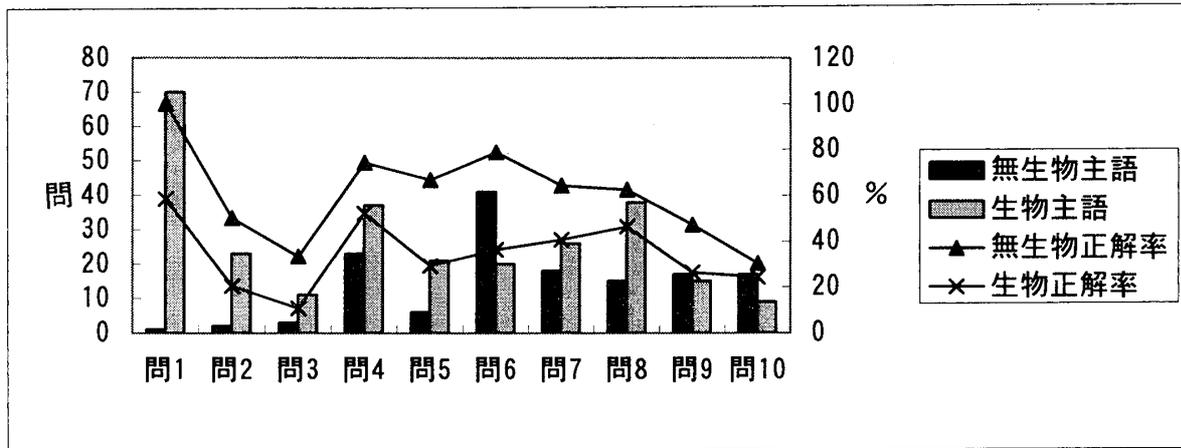
| | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 合計 |
|---------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|
| 無生物主語 | 1 | 4 | 9 | 31 | 9 | 52 | 28 | 24 | 36 | 56 | 250 |
| 正解数 (%) | 1 (100) | 2 (50) | 3 (33.3) | 23 (74.2) | 6 (66.7) | 41 (78.8) | 18 (64.3) | 15 (62.5) | 17 (47.2) | 17 (30.4) | 143 (57.2) |
| 誤答数 (%) | 0 (0) | 2 (50) | 6 (66.7) | 8 (25.8) | 3 (33.3) | 11 (21.2) | 10 (35.7) | 9 (37.5) | 19 (52.8) | 39 (69.6) | 107 (42.8) |
| 生物主語 | 120 | 112 | 103 | 71 | 72 | 55 | 64 | 82 | 57 | 37 | 773 |
| 正解数 (%) | 70 (58.3) | 23 (20.5) | 11 (10.7) | 37 (52.1) | 21 (29.2) | 20 (36.4) | 26 (40.6) | 38 (46.3) | 15 (26.3) | 9 (24.3) | 270 (34.9) |
| 誤答数 (%) | 50 (41.7) | 89 (79.5) | 92 (89.3) | 34 (47.9) | 51 (70.8) | 35 (63.6) | 38 (59.4) | 44 (53.7) | 42 (73.7) | 28 (75.7) | 503 (65.1) |
| 無答 | 4 | 9 | 13 | 23 | 44 | 18 | 33 | 19 | 32 | 32 | 227 |

カイ2乗検定

問1 欠損値がある為検定不可

問6 $\chi^2 = 19.683$ $p = 0.000^* < \alpha = 0.05$ 問2 $\chi^2 = 1.983$ $p = 0.159 > \alpha = 0.05$ 問7 $\chi^2 = 4.370$ $p = 0.037^* < \alpha = 0.05$ 問3 $\chi^2 = 3.883$ $p = 0.049^* < \alpha = 0.05$ 問8 $\chi^2 = 1.939$ $p = 0.164 > \alpha = 0.05$ 問4 $\chi^2 = 4.344$ $p = 0.037^* < \alpha = 0.05$ 問9 $\chi^2 = 4.273$ $p = 0.039^* < \alpha = 0.05$ 問5 $\chi^2 = 5.063$ $p = 0.024^* < \alpha = 0.05$ 問10 $\chi^2 = 0.403$ $p = 0.526 > \alpha = 0.05$

図 1:各問における各主語の選択数と正解率



問1（「どうしてここに来たのいるの？」）に関しては、表4が示すように生物主語が96%と圧倒的に多く選択されており、しかも正解率が58.67%という高い割合を示した。これは「どうしてここに来たの？」という問に対して、Whyを用いて global errors を犯すことなくほぼ正しく答えられた学生が多かったのが理由である。これは、文そのものが非常に英語に置き換えやすい文であったことが原因と考えられる。しかし、ここでは正解率より、“What brought you here?”という表現をほとんどの学生が用いることがなかったことに注目すべきである。つまり多くの学生が答えた“Why did you come here?”という文には、「来なくてもいいのになぜきたの？」という含意があるということを考慮すると、決して正解とは言えない。「英語らしさ」の観点からすると“Why did you come here?”という文は誤りであると考えられる。しかしながら、ここでは、状況、抑揚などより何とか意図は通じると解釈し、誤りとは扱わなかった。この問より「英語らしさ」の観点からは“What brought you here?”のような決まりきった英語らしい表現は状況に応じて、文そのものを固まりとして記憶すべきではないかということを示唆していると考えられる。

問2（「毎日10分歩いているから健康よ」）は、問1に次いで生物主語を用いた学生が89.60%と多くいたが、正解率は低く21.55%に留まった。ここでは、生物主語を用いること自体は、正しい判断であるのだが、「毎日10分歩いているから」の表現と「健康よ」の因果関係をうまく結びつけることができなかった文や、「健康である」という表現も health と healthy の使い分けに問題が多くあった。ここでは無生物主語を選ぶ文ではないので、生物主語における正解率を見てみると正解率20.5%に対して誤答率は79.5%と圧倒的に誤答が多いことがわかった。このことから“be in good health”のようなコロケーションを固ま

りで記憶する必要性を示唆していると考ええる。

問3（「きのう、交通事故で3人の男の子が死んだ」）も、生物主語を採った方が自然な英語表現となる問である。そして、生物主語を選んだ学生が圧倒的に多く82.4%の選択率であった。しかし、その正解率は最低の12.5%であった。特徴的な誤りとしては、「交通事故で」という表現に多くの学生がつかずいていることが見て取れた。例えば“in a traffic accident”とすべきところを“Three boys died by a traffic accident.”とし、統語法的には主語+動詞+前置詞+名詞というように正しいが関連している単語同士がうまく絡み合っていない syntax error と考えられる誤りが多く見られた。無生物主語と生物主語の関係においては、無生物主語の方が正解率は高い ($\chi^2=3.883$ $p=0.049^* < \alpha=0.05$) 結果となったが、ここも生物主語を採るべき問いであるのでその正解率(10.7%)と誤答率(89.3%)を比べてみると、圧倒的に誤答が多いことがわかる。ここでも、問2の結果と同様に“in a traffic accident”といった語句を固まりとして記憶すべきであることを示唆していると考ええる。

問4（「この薬を飲んだら、気分が良くなります」）は無生物主語を採ったほうが自然な英語表現になるにもかかわらず、やはり、生物主語をとり、直接法のif節を用いた学生が多かった。そして、this medicine を主語に採り make という他動詞を用いて表現した学生と直説法のif節をきちんと習得している少数学生が正解をしており、この2種類の英文を合わせて、58.82%という高い正解率になった。ここで、明記しておくべきことは、直接法のif節を用いて表現しようとした学生の英文の中に不完全なものが多く存在したのに対して、無生物主語他動表現を用いて表現した英文にはほとんど間違いがなく(74.20%)、無生物主語で答えた方が正解率が高い傾向にあることを示した ($\chi^2=4.344$ $p=0.037^* < \alpha=0.05$)。

問5（「病気のために引退せざるを得なかった」）は、問2、3と同様に生物主語を採ったほうが自然な英語表現となる英文である。そして、この正解率は問2、問3に次いで低い33.33%であった。特徴的なことは、表5が示しているように、最も無答(44問)が多く、まず、主語の選択につまずきを感じる学生が多かったということである。次に特徴的なことは、cannot help ~ing という慣用表現を用いて表わそうとした英文には比較的間違いが少なかったことである。しかし、ここでは無生物主語で表すことは形式的な堅苦しい表現となり、状況設定とは沿わない表現となってしまうため、生物主語で表すべきであった。正解率に関しては生物主語で答えた英文のうち29.2%が正解であったのに対し、無生物主語で書かれた英文のうち66.7%が正解であり、無生物主語で表したほうが正解率が高くなる傾向にある ($\chi^2=5.063$ $p=0.024^* < \alpha=0.05$) ことを示した。このことから、形式的な

表現と口語的な表現とを区別して習得する必要があることを示唆していると考えられる。

問 6 (「その曲を聞くと私はかなしくなります」) は主語の選択においては 41.6% の無生物主語と 44% の生物主語の選択率ではほぼ同じであり、正解率は 57% と問 1, 問 4 について高い正答率を示した問であった。これは、使役動詞 *make* の用法がかなり知識として定着し応用されていることを示していると考えられる。そして、ここでも無生物主語を選んだ英文のうちで 78.8% が正しく書けたのに対して、生物主語を選んだ英文のうちでは 36.4% が正解で無生物主語の半分と減少し、無生物主語で表した方が正解率が高くなる傾向にあることを示した ($\chi^2=19.683$ $p=0.000^* < \alpha=0.05$)。また、生物主語を選び *When* や分詞構文を用いて表現しようとしている文においてはなかなか最後まで書ききれていない解答文が多く見受けられた。この結果より *make* と主語の関係における英語的発想はかなり定着していると推測できる。

問 7 (「天気予報によると明日は晴れるそうよ」) も無生物主語を採ったほうが自然な表現となる問であるが、やはり生物主語選択の方が多く、他の問の結果と同じく無生物主語を採った英文は正解が多く (64.3%), 逆に生物主語を採った英文には誤文が多く (59.4%) 見られ、無生物主語で表した方が正解率が上がる傾向にある ($\chi^2=4.370$ $p=0.037^* < \alpha=0.05$) ことがわかった。誤りの多くは *fine* を動詞扱いにしていたり、「～によると」がうまく表現できなかつたりしたケースが多く、また無答も 33% を占めていた。この結果より *say* や *tell* などの *reporting* 動詞を主語とともに記憶させることによって比較的容易に表現できるようになるのではないかと示唆していると考えられる。

問 8 (「雨で花見にいけませんでした」) に関しては 3 人の英語母語話者の内 2 人の英語母語話者が “*The rain washed out the cherry blossoms viewing.*” と解答したため無生物主語を採ったほうが自然な英語表現になる英文である。しかし、65.6% の学生が生物主語を選択し、19.2% が無生物主語を選択していた。全体の正解率は 50% で、無生物を選んだ英文の 62.2% が正解であったのに対して、生物主語を選択した英文の 46.3% が正解し、正解率において差があるとは言えなかった ($\chi^2=1.939$ $p=0.164 > \alpha=0.05$)。特徴的なことは無生物主語を選択した文の中でも *prevent ~from* というやや硬い形式的表現ではあるが、構文を使って表現しようとした文は比較的正しく情報を伝えられていたが、口語的表現となる “*wash out*” という表現はほとんどの学生からはみられることはできなかった。誤りの文の多くは “*I*” や “*We*” を主語にとり、自分の意思で花見に行かなかったという意味の文が文法的誤りに加えて目についた。このことから問 5, 問 7 と同様に形式的表現と口

語的表現を区別し記憶する必要性とコロケーションの重要性が明らかになったと考える。

問9(「この道を行くと駅に着きます」)も無生物主語を選んだ英文のほうが自然な表現の間である。しかし、45.6%の学生が生物主語を選択しており、無生物主語を選択したのは28.8%であった。正解率は、その逆で生物主語選択が26.3%、無生物主語選択が47.2%を示し無生物主語で表した方が正解率が高くなる傾向にあることを示した($\chi^2=4.273$ $p=0.039^* < \alpha=0.05$)。解答を詳しく見てみると、無生物主語を選んだ英文の中に“*This street take you a station.*”という英文が多く、三単現-s欠如はlocal errorとして処理することができるが、toを落とすことによって文構造を崩している点から、global errorとして、処理をしたことが、せつかく無生物主語を選んだにもかかわらず、あまり正解率が伸びなかった結果になった。それにもかかわらず無生物主語で表した方が正解率が高くなる傾向があることがわかった($\chi^2=4.273$ $p=0.039^* < \alpha=0.05$)。

問10(「この写真を見ると学生時代を思い出す」)は44.8%の学生が無生物主語を選択し、29.60%の学生が生物主語を選択していた。全体の正解率は27.95%と低く、しかも、無生物主語で表された英文の正解率も30.4%と低く、生物主語で表されて正解だった英文である24.30%より、すこし上回ってはいるが、差があるとは言えない($\chi^2=0.403$ $p=0.526 > \alpha=0.05$)。無生物主語の英文の中の、誤りの英文を詳しく見てみると、remindとrememberの使い分けができておらず、rememberを動詞に選んだ英文、動詞だけ抜けている英文、make me rememberとしている英文などが目立った。逆に、生物主語をとった中の誤りの英文を見てみると、Iを主語にとり、動詞をremindにしている学生やI remember this photo (picture).....としている学生が多かった。このようにrememberやremindなど、自動詞・他動詞など特に誤りやすい語はその語と周りの語とのコロケーションに注意を向けさせる必要があるのではないかと思われる。

3.4 学習者レベルにおける無生物主語 vs. 生物主語

以上のように、生物主語と無生物主語における正誤関係では無生物主語を選択した方が誤りが少ないという結果になった。しかし、学習者の能力によって、つまり、学習者レベルが高いと無生物主語を選ぶ確率が高く、その正解率も高くなるのではないかという疑問が生まれる。そこで、学習者を英検2級と準2級を取得した学生を上位レベルに、そしてそれ以外の級の取得者を下位レベルとして分け、各主語の選択数と正解数をまとめたものが表6及び図2・3である。

英語資格の欄が無記名の学生が 39 名いた為に合計 86 名による分析となった。表 6 より無生物主語を選択した英文の平均数は上位レベルで 2.74 に対して下位レベルでは 1.86、また正解率はそれぞれ 70.27%と 49.09%を示し、予測どおり上位レベルの方が選択数においても正解率においても高い数値を示した。また、生物主語を選択した英文の平均数も上位レベルの方が高く下位レベル 6.08 に対して 6.56 でその正解率は上位レベル 41.81%と下位レベル 30.73%であった。これらの結果より上位レベルでの無生物主語と生物主語の正解数においては無生物主語の方が正解率が高く ($\chi^2=16.910$ $p=0.000^* < \alpha=0.05$)、また下位レベルでの無生物主語と生物主語の正解数においても無生物主語の方が正解率が高い ($\chi^2=12.057$ $p=0.001^* < \alpha=0.05$) ことがわかった。つまり、それぞれのレベルにおいて無生物主語の方が正解率が高い傾向にあると言える。また、無生物主語における上位者と下位者の正解数では上位者のほうが正解率が高い ($\chi^2=8.126$ $p=0.004^* < \alpha=0.05$) 傾向にあると言えるが、生物主語における上位者と下位者の正解数においては、その正解率の関係が無生物主語における関係より非常にゆるくなっていることがわかった ($\chi^2=6.109$ $p=0.013^* < \alpha=0.05$)。つまり、無生物主語の英文では、下位者と比べると上位者の方が正解率が高まる傾向にあると言えるが、生物主語の英文においては上位者・下位者においてはその正解率の差がゆるやかになることがわかった。

表 6：レベル別による全体と主語選択別による正解率

| | 人数 | 全体の 正解数 | 平均 正解数 | 無生物主語 選択数 | 正解数 | 生物主語 選択数 | 正解数 |
|-----|-----|------------|-----------|------------------|----------------|------------------|-----------------|
| 上位 | 27 | 126 | 4.66 | 74 (平均 2.74) | 52 (70.27%) | 177 (平均 6.56) | 74 (41.81%) |
| 下位 | 59 | 165 | 2.80 | 110 (平均 1.86) | 54 (49.09%) | 358 (平均 6.08) | 111 (30.73%) |
| 無記名 | 39 | 121 | 3.18 | 68 (平均 1.74) | 37 (54.41%) | 236 (平均 6.05) | 84 (36.01%) |
| 合計 | 125 | 412 | | 252 | 143 | 771 | 269 |

(注)：上位＝2・準2級，下位＝3・4・5級および全商2級

図 2: 学習者レベルにおける各主語の正答率

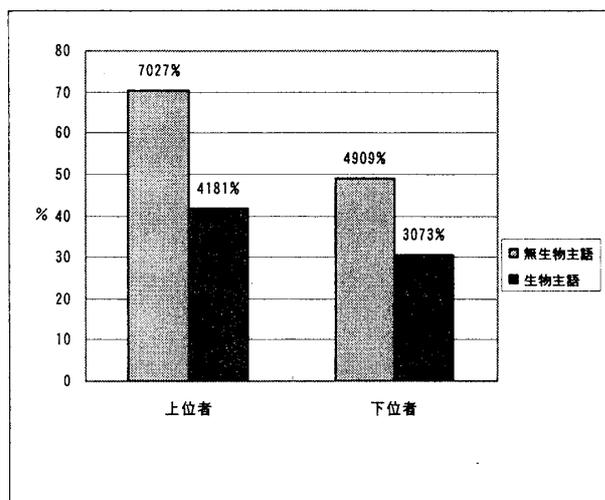
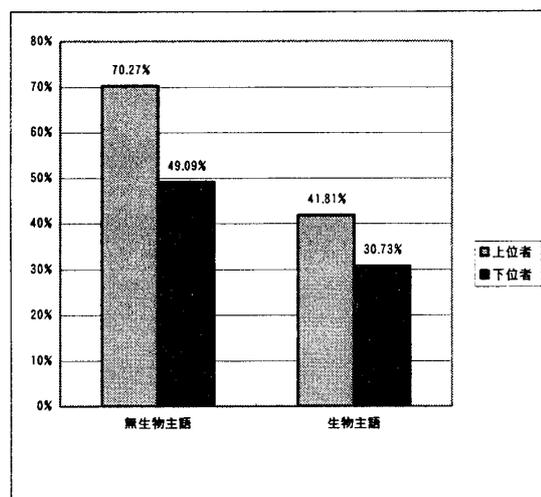


図 3: 各主語における上位者・下位の正答率



4. 結論

各問における主語の選択数とその割合は全体の 61.84%が生物主語を選択し、20%が無生物主語を選択していた。そして、その正解率は無生物主語においては 57.20%、生物主語においては 34.92%と無生物主語を選択した方が正解率が高いことがわかった。また、適切な主語選択における無生物主語の正解率は 57.89%であるのに対し、生物主語においては 19.16%と圧倒的に無生物主語を採るべき問における正解率は生物主語より正解率が高かった。各問における各主語の正解数と誤答数の関係においても無生物主語を採った文の方が正解率が高まり、生物主語を採るべき問 2, 3, 5 においてはその正解率は最下位 1~3 位を占めていた。上位者・下位者の関係においては主語の選択にかかわらず上位者のほうが正解率は高まったが、各主語と学習者のレベルとの関係においては、無生物主語におけるほど、生物主語においては、上位・下位における正答の割合に差は出ない傾向にあることがわかった。以上の結果より、「かたまり(chunk)として記憶された無生物主語他動表現の英文の方が、生物主語で書かれた英文より正しく表現される可能性が強い」という仮説は確認された。

4.1 教育的示唆

Wada (2002) は日本の環境での英語学習においては暗記を通しての語彙学習の方が良い結果をもたらしたという証明を行い、最近の言語指導が“anti-memorization”にあまりにも偏りすぎているのではないかと今のコミュニカティブ偏重の教授法に警告を発している。

また、Osburn (1993) が「外国語教授法が次第に暗記を誹謗しているけれども、外国語としての立場からすれば暗記の効用は生徒にすぐに応用させることができる言語材料を与えたり、理解の基盤としての役割を果たす手段としてはっきり認められている」(p.5, 筆者訳)と主張しているように、日本のような第二言語としての英語ではなく外国語としての英語の環境においては強制的な暗記による効用は否定できないと筆者は考えている。また、教授法においては、Nattinger (1980)は「言語はある場面にたいして適切な定型ユニット (ready-made units) をつなぎ合わせることによって産出するものである。そのようなユニットを理解することがさまざまな場面においてパターンを予測することができる。したがって、指導はこのようなパターンとそれらをいかにつなぎ合わせるかの方法を中心にするべきである」(p.341, 筆者訳)と提案している。また、Zimmerman (1997) も、言語産出は、文法に統制された過程ではなく、記憶による大きな句単位 (phrasal units) の回復であると認め、赤野(2002)も言語は可能な単語の組み合わせがすべて実現されているというより、大半はあらかじめ定型化された (pre-constructed) 予測可能なことばの固まりからなっていると述べている。これらの主張・提案と本研究の結論より、意味のある文脈における input をしつつ、単語をばらばらに記憶するのではなく、chunk あるいはコロケーションとして、つまり、語を一つの意味の塊として捉えて暗記することをここで提案したい。

コロケーションに関しては内容語との結合で構成される lexical collocations と機能語との結合で構成される grammatical collocations があるが、ここでは特に lexical collocations を重要視したい。なぜなら、tell a lie とは言うが tell a promise とは言わず、また、make a promise とは言うが make a lie とは言わない(白畑智彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則, 1999)など、語間の相性は単語の意味を知っているだけではどうにもならず、文法の知識や日本語からの推測では解決できない問題 (西澤正幸, 2003) だからである。

4.2 おわりに

今回の調査から無生物主語他動表現について得られた結果から、日本人学習者にとって、英語をばらばらの任意のつながりとしてインプットするよりは何かしらの制限のあるかたまりとして、強制的記憶によるインプットをした方がアウトプットにおいてよい結果をもたらすことがわかった。最近、コーパスを利用した辞書やコーパス関連ソフトウェアなどの開発により、言葉のつながりや実際に使われている表現などが英語を外国語とした学習者にも比較的容易に利用できるようになってきた。自分よがりな英語表現ではなくグロー

バル社会に対応した、より英語らしい表現をメリハリのある、かつ効果的な表現を日本人英語学習者が習得することを強く願うものである。

参考文献

- 赤野一郎 (2002). コーパスと語彙 (コーパス学会大会レジメ) 6.
- 池上嘉彦 (1982). 「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語—」『日英語比較講座』69-110. 大修館書店.
- 石綿敏雄・高田誠 (1990). 『対照言語学』おうふう.
- 榎垣実 (1975). 『日英比較表現論』大修館書店.
- 江川泰一郎 (1998). 改定3版『英文法解説』金子書房.
- 國廣哲彌 (1974). 「人間中心と状況中心」『英語青年』2月号 研究社出版.
- 國廣哲彌 (1974). 「日英語表現体系の比較」『言語生活』3月号 筑摩書房.
- 小島義郎 (1988). 『日本語の意味 英語の意味』南雲堂.
- 四宮満 (1999). 『英語の発想と表現』丸善ライブラリー.
- 白畑智彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (1999). 『英語教育用語辞典』60-61.
- 西澤正幸 (2003). 『英語教育』5月号 52(2), 94. 研究社出版.
- 長谷川潔 (1996). 『私の英語開眼—「英語らしさ」をどう身につけるか』大修館書店.
- 山田雅重 (1997). 『日本語の発想・英語の発想』丸善ライブラリー.
- 山田和男 (1979). 『英作文研究』文建書房.
- 綿貫陽・淀縄光洋・Mark F. Petersen (1994). 『教師のためのロイヤル英文法』旺文社
- Beretta, A. (1992). What can be learned from the Bangalore Evaluation. In J. C. Aldersan & A. Beretta (Eds.), *Evaluating second language education* (pp. 250-273). Cambridge: Cambridge University Press.
- Hendrickson, J. (1978). Error correction in foreign language teaching: Recent theory, research, and practice. *Modern Language Journal*, 62, 387-398.
- Hinds, J. (1986). *Situation vs. person focus*. 西光義弘注 くろしお出版.
- Nattinger, J.R. (1980). A lexical phrase grammar for ESL. *TESOL Quarterly*, 14(3), 337-344.
- Osburn, A.G. (1993). Reexamining memorization. Paper presented at the Annual Conference of the Teachers of English to Speakers of Other Languages (24th, San

Francisco, CA. March, 1990).

Sinclair, J.M. (1991). *Corpus, concordance, collocation*. Oxford: Oxford University Press.

Wada, C. (2002). Reconsidering Memorization: A study on vocabulary learning. *JACET Bulletin*, 35, 15-26.

Zimmerman, C.B. (1997). Historical trends in second language vocabulary instruction. In J. Coady & T. Huckin (Eds.), *Second language vocabulary acquisition: A rationale for pedagogy* (pp. 5-19). Cambridge: Cambridge University Press.

付録 1

アンケート調査

H.13.4 実施

このアンケートは研究のデータに使用されるものであり、個人の英語能力を測ったり、また今後の英語授業に影響するものではありません。協力をお願いいたします。

| 学部 | 性別 | | | |
|-------|-------------|------|-------|---------|
| 高校卒業後 | 一年未満 | 2年未満 | 3年未満 | その他(年) |
| 英語が | 得意 | やや得意 | やや不得意 | 不得意 |
| 英語が | 大好き (理由) | 好き | 嫌い | 大嫌い |
| 英語資格 | 英検 | 級 | TOEFL | 点 |
| | | | TOEIC | 点 |
| | | | その他 | |

つぎの和文を英文に置き換えてください。

1. (あなたは岡山から大阪に向かい、今大阪駅にいます。そこで偶然友人とばったり会いました。)

どうしてここに来たの(いるの)? _____?

2. (健康について話しています。)

毎日10分歩いているから健康よ。_____。

3. (新聞を読んでいたあなた。)

きのう、交通事故で3人の男の子が死んだ。_____。

4. (友人が風邪をひいてしまいました。)

この薬を飲んだら、気分が良くなります。_____。

5. (友人があなたに尋ねました。「どうしてあの野球選手は引退したの?」)

病気のために引退せざるをえなかった。_____。

6. (ラジオからある曲が流れてきました。友人にその曲について話します。)

その曲を聴くと私は悲しくなります。_____。

7. (テレビを観ていたあなた。)

天気予報によると明日は晴れるそうよ。_____。

8. (きのう花見に行くはずでしたが.....)

雨で花見に行けませんでした。_____。

9. (見知らぬ人が道に迷って、駅への道を尋ねてきました。)

この道を行くと駅に着きます。_____。

10. (二人でアルバムを見ていました。)

この写真を見ると学生時代を思い出す。_____。

付表1 高校教科書 English Writing

| | 出版社 | 著書名 | 項目 | 導入他動詞 | 例文 | 練習問題 |
|----|-------|---------------|---------------|--|---|----------------------------------|
| 1 | 一橋出版 | Spiral | 「無生物主語」を使った表現 | take/bring | I ask her what had brought her to our city | A. [] 補充 |
| 2 | 啓林館 | Milestone | 無生物主語 | keep/make | The rain kept me from hanging the washing out to dry. | A. [] 補充 B. 英文完成 |
| 3 | 教育出版 | One World | 無生物主語 | make/force/bring/take/keep/remind/relieve/give/broaden | What made you do such a foolish thing? | B. 英文完成 C. 英訳 (ヒントあり) |
| 4 | 数研出版 | Polestar | 無生物主語 | make/bring/remind/prevent | This medicine will make you feel better. | A. [] 補充 C. 英訳 (ヒントなし) |
| 5 | 文英堂 | Unicorn | 文型 | make | Will this present make her happy? | D. 並び替え |
| 6 | 大修館 | Genius | 無生物主語の構文 | make/prevent/remind/take/force/satisfy | What makes you so angry? | A. [] 補充 C. 英訳 (ヒントなし) |
| 7 | 開拓社 | New Access | 無生物主語 | keep/prevent/take/enable | The cold weather kept us indoors. | A. [] 補充 D. 並び替え |
| 8 | 旺文社 | Communicative | 英語の語順 | make | The news made me happy. | C. 英訳 (ヒントなし) D. 並び替え |
| 9 | 開隆堂 | Sunshine | 「原因」表現 | make/cause | The traffic jam caused me to be late for school. | B. 英文完成 (日本語あり) |
| 10 | 研究社 | Lighthouse | 英語らしい主語 | make/cause/lead/prevent/take/destroy | What makes the Japanese work so hard? | A. [] 補充 C. 英訳 (ヒントあり) |
| 11 | 池田書店 | Practical | 無生物主語 | lead/bring/enable/prevent | This road will lead you to the city hall. | B. 英文完成 (日本語あり) C. 英訳 (ヒントあり) |
| 12 | 尚学図書 | Progressive | 主語はどれだ | bring/make | A few minutes' walk will bring you to a big intersection. | A. [] 補充 D. 並び替え (日本語あり) |
| 13 | 増進堂 | Mainstream | 原因 | cause | The earthquake caused the train to be delayed. | A. [] 補充 E. 書き換え (無生物→生物主語) |
| 14 | 第一学習社 | Creative | コラム | make/turn | The story made her sad. | B./D. 英文完成並び替え B./C. 英文完成英訳 |

- 練習問題パターン A. Ten minutes' walk () you to one of the parks. 選択肢 a~d
- B. The heavy snow kept _____.(日本語)
- C. あのバスに乗れば東京駅へ行けます。(take)
- D. 何故そんな風に思うのですか。(makes, you, what, so, think)?
- E. The stormy weather prevented us from starting. (We で始まる文で)